

国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」

平成24年9月29日（土）に日本文化研究所主催、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者 井上順孝）、宗教文化教育推進センター（CERC）の共催により、国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」を開催した。

宗教文化は、宗教学に関わる研究領域（宗教社会学、宗教心理学、宗教民族学、宗教民俗学、宗教哲学、宗教現象学、宗教地理学など）以外にも、文学、美術、建築、音楽、映画、法律、経済等々、広い学問領域と関わっている。日本および外国の宗教文化の理解を深めるための宗教文化教育の教材を考えたとき、こうした宗教文化の広がりを踏まえる必要があるだろう。

このような問題意識のもと、2009年には宗教文化教育の教材の一つとして映画を位置づけたときに、どのような可能性、利用法があり、また問題点を孕んでいるかを議論する国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」を開催した。それにつづく形で、今回は文学、美術（アニメやマンガも含む）を中心とし、それぞれの分野の研究者に、授業や研究において宗教文化に関わるテーマをどのように扱っているかを発題してもらい、宗教文化教育の教材として文学や美術を活かすためには、どのような方法があるのか、文学や美術を学ぶために必要な宗教文化の知識とはどういったものか、などの点を議論することとした。

本フォーラムは四つのセッションを設け、各セッションでは、発題に対しコメンテーター

がコメントを加え、フロアを交えての質疑応答を行なった。最後には総合討議が行なわれた。各セッションの発題者、タイトル、コメンテーターは、次のとおりである。司会は井上順孝がすべて行なった。

第1セッション

ロベルタ・ストリッポリ Roberta Strippoli (Binghamton University SUNY, USA) 「古典文学のなかの宗教」

コメンテーター 加瀬直弥（国学院大学）

第2セッション

有田英也（成城大学）「運命に抗う人びと—宗教で読むカミュの『ペスト』」

コメンテーター 伊達聖伸（上智大学）

第3セッション

小池寿子（国学院大学）「『死の舞踏』に見るキリスト教的死生観」

コメンテーター 平藤喜久子（国学院大学）

第4セッション

マーク・マックウィリアムズ Mark MacWilliams (St. Lawrence University, USA) 「イエスの再生—映画、マンガ、アニメにおける救世主のポップカルチャー的変容」

コメンテーター 小原克博（同志社大学）

各セッションの内容を次にまとめる。

第一セッションのストリッポリ氏は、日本の中世文学を専門とする立場から、アメリカ

の大学で日本の古典を教える際の問題点や工夫について発題した。学生は多様な民族的背景を持ち、宗教についての認識もそれぞれ異なっている。そうしたなかで、源氏物語や平家物語などを教える難しさを、ディスカッションによって乗り越えようとする試みなどが紹介された。たとえば「菅原伝授手習鑑」の「寺子屋」では、主筋を救うために、我が子を犠牲にする話が語られ、それが日本文化への偏見となりがちであるが、ディスカッションのなかでは、聖書のアブラハムとイサクの話などを提示し、比較対照させることを試みたという。この発題についてのコメントとしては、アメリカの状況は日本においてもさほど変わらず、文学研究者の宗教文化理解が求められている現状などが指摘された。フロアからは、古典理解の場合に天皇の存在について伝える難しさをどう克服しているかなどについて質問が出た。

第2セッションの有田氏は、東日本大震災以降、日本でも言及される機会が増えたカミュの『ペスト』について、現代フランス文学、思想を専門とする立場から取り上げ、論じた。伝染病という不条理な悪に立ち向かう人々を描いたこの作品を、時代背景や文化的背景に即して読み解く試みをとおし、授業での伝え方を実践した。この発題に対し伊達氏は、非キリスト教圏であり、なおかつ震災を経験した日本において、『ペスト』がどのように受け止められるかという問いかけをした。

不条理に襲い来る伝染病、そして人を選ばず訪れる死が、その宗教文化のなかでどのように受け止められ、表現されていくか、またそのことをどう伝えていくかという課題は、次の第3セッションにもつながっていった。

第3セッションで小池氏は、西洋美術史の立場から、15世紀から16世紀にかけてヨー

ロッパで流布した「死の舞踏」という死者が行列や輪舞によって生者を墓地、すなわち死へと誘う姿を表現した図像を取り上げた。この図像の流行の背景には、疫病ペストの流行があったといわれている。発題では、この図像が、実際には世俗的性格をもった舞踏として、当初は上演されていたとする説を論じながら、その舞踏が道德教訓的性格を意図的に強化され、キリスト教的救済史観に組み込まれてゆくプロセスを明らかにした。この発題に対し、平藤は、「死のポルノグラフィ化」という近代化の議論とのかかわりや、また死の舞踏が持つ道德教訓的性格の内容などについてコメントをした。

第4セッションでは、ポップカルチャーと宗教について研究を進めてきたマックウィリアムズ氏が、アメリカと日本におけるイエス像について発題した。具体的にはメル・ギブソンの『パッション』(2004)や中村光のマンガ『聖☆おにいさん』、宮崎駿のアニメ『風の谷のナウシカ』を取り上げた。『パッション』については、そのイメージの源流にあるイエスの絵を紹介し、映画が描く「男らしいイエス」が「神の子」である超人としての神々しさを強調しているとした。宮崎アニメのナウシカは、それとは真逆の少女の救世主である。そして『聖☆おにいさん』は、イエスが現代日本での生活を楽しむことで、「神の子」であるという典型的なステレオタイプをからかうような描き方となっている。この発題に対し、小原氏は、伝統的な表現媒体というよりも、ポップカルチャーがイエスのイメージを創出していることを指摘し、その上で、こうした表象が文化の枠をこえて受容されるのかどうかという問題を提起した。

以上のセッションを踏まえ、総合討議ではフロアからの質問や意見を受けて活発な討議

がなされた。イスラームが専門の小田淑子氏（関西大学）は、今回のフォーラムのようなテーマの場合、イスラームの宗教文化についての議論が入らないのではないかという問題を指摘した。そこから、多様な宗教文化を持つ学生がいる場合の配慮の必要性という課題が議論された。また、土屋博氏（宗教文化教育推進センター長）からは、「死の舞踏」という表象が、現代にも意義を持つだろうかという問いや、ポップカルチャーが創出するイエス像は、キリスト教の発展にどう関わるのかといった問いかけがなされた。

発題者のマックウィリアムズ氏とストリップポリ氏からは、アメリカの学生がそれほど宗教についての知識を持っているわけでもなく、保守的な傾向があるわけでもないという

説明がなされた。

今回のフォーラムでは、宗教そのものというよりも宗教を背景とした文化的な営みを取り上げ、それぞれの分野の専門家と宗教研究者がディスカッションをするという形となった。「死」や「災害」を描く文学や図像、神を描くポップカルチャー、異文化で伝える古典など、多様なテーマではあったが、教育の場を想定することにより、参加者の議論が生産的になったと思われる。

なお、本フォーラムは精神文化映像社のご協力により、前後編と2部制でスカパー！216ch ベターライフチャンネルで放映された。今後は、フォーラムの映像の活用方法や、出版物としての公開なども検討していく予定である。（平藤喜久子）